戦争突入 青春奪われ

出産「この上ない幸福」

（1面から続く）

原爆を落とされる前の広島は、思い出にあふれている。梶野清子(94)＝松山市＝は中心市街地にある商家（現中区富士見町）の一人娘だった。大切に育てられ、習字やお茶など毎日が稽古事だった。水泳も得意で、橋から川に飛び込んで遊び、真っ黒に日に焼けた姿がトレードマークだった。

広島女子商業学校（現広島翔洋高校）時代には、原爆の投下目標になったといわれる相生橋で、よくボートをこいで遊んだ。文章を書くのが好きで、友達に頼まれてラブレターを代筆したこともある。「先生に見つかって、母が呼ばれてしかられてね」。おどけた口調で目を細め、懐かしむ。

日中戦争が始まったのは、清子が16歳の時だった。年を追うごとに世間の戦時色が濃くなった。清子が年ごろになると、母は戦争に行かないで済む男性を懸命に探した。陸軍の拠点だった広島では将校が縁談相手に選ばれることも多かったが、日中戦争が泥沼化し、清子の友達にも結婚直後に夫が戦死するという不幸が起こっていた。「あのころ、自殺はとても悪いことという意識が国民的にあったから、それはなさらないけれど、（友達は）放心したふうで」

1941年3月、19歳の清子は、病気のため徴兵されなかった27歳の銀行員の勇（故人）と祝言を挙げた。だが、身内の一部からは「どうしてそんな相手にするのか」と母を責める声が上がった。政府が戦争遂行に必要な人員を確保しようと「結婚十訓」を発表し「産めよ　殖やせよ　国のため」「心身ともに健康な人を選べ」と号令した時代だった。母が蔵の中で泣く姿を清子は覚えている。

太平洋戦争が始まると、旧制中学に通学中だった弟が、「徴兵を待てないのかい」という母の言葉を振り切って海軍に志願入隊した。マラリアを発病して帰還し、苦しんだ末に息を引き取った。母は倒れ、清子はあまりのショックで放心し、涙も出なかった。

戦況が悪化していた44年6月、清子は長女の広子を授かる。つやつやの髪に大きな目。我が子ながら「お人形さんみたいにかわいい」と思った。小さな手を乳房に添え、にこにこしながら乳を飲む姿がいとおしくて、たまらない。母も毎日やって来て抱っこした。45年の初めごろ、長男の剛を妊娠。先の見えない暗い時代だったが、清子は「この上ない幸福」を感じていた。

（敬称略、中田佐知子）

相生橋のそばでボートをこいで友人と遊ぶ広島女子商業高校時代の梶野清子（上）。橋は後に、原爆投下の目標になったとされる＝1930年代後半、広島市の現在の原爆ドーム北側

えひめ 戦後70年

正当化論 米で根強く

広島市立大広島平和研究所副所長の水本和実教授によると、米国の原爆開発の直接の契機となったのは、一通の手紙だった。

1938年、ナチス率いるドイツで核エネルギーを発生させる核分裂が発見された。ナチスによるユダヤ人迫害が進む中、米国に亡命したユダヤ系科学者らが39年、物理学者アインシュタインの署名を添えてドイツに先駆けて原爆を開発するよう求める手紙をルーズベルト米大統領に送った。

42年、米国は原爆製造計画「マンハッタン計画」に着手。ドイツ降伏の見通しが立つと、44年9月、米英首脳が原爆の対日投下に合意した。

研究者が指摘する一般的な原爆投下の理由は、戦争の早期終結と米兵の犠牲者減（米国の公式見解）▽対日参戦によるソ連の東アジアでの影響力拡大抑制▽日本人への報復、人種差別▽新型兵器のデータ収集▽巨額の秘密予算を投じた原爆開発の正当化―など。戦後、原爆投下時の米陸軍長官が論文で「地上戦で死亡が予想された米兵100万人が救われた」と主張。米国内では日本人の犠牲も回避されたとする考えが広まり、原爆正当化論は教科書にも記述され、社会に根付いている。

水本教授は「戦争当時の米軍による本土決戦死者推計は6万5千人や4万5千人であり、『100万人救済論』はまやかし」としている。

（高田未来）

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。